

# 豊かな体験活動を活かした「環境」の学習 その2

— 第4学年 太田川探検隊パートIIの実践を通して —

佐藤 健

## 1. はじめに

「環境領域」における中学年のねらいを受けて、第4学年では、昨年度に引き続き次のような「めざす子ども像」を設定した。

- ・ 水と水を取り巻く自然の変化やサイクルを豊かに感じとることができる子ども
- ・ 水を中心とした身近な環境に関心を持ち、自ら進んで調べたり関わったりすることができる子ども

児童は、昨年度の「環境」の学習で、猿猴川探検隊、太田川探検隊パートIの学習を積み重ねており、「自然の変化やサイクルを豊かに感じとる」ことに一定の成果を積み重ねてきている。そこで、第4学年では、これまでの学習を継続・発展させ、「水を中心とした身近な環境に関心を持ち、自ら進んで調べたり関わったりする」ことを大切にすることとした。自分との関わりという視点から環境を見つめることで、高学年のねらいにつなげていくことも意図している。

本稿では、研究テーマ「自立に向かう子どもたち」と照らし合わせたうえで、どのような活動の積み重ねが有効であるのか、について述べていく。

## 2. 研究の視点

本校の研究テーマは、『自立に向かう子どもたち』である。本年度も引き続き「自分で決める場を大切に」をサブテーマとしている。「環境領域」に何が求められているのであろうか。

「自分で決める」ためには、子どもたちが学習の見通しをもっていることが前提である。そこで、本年度は、昨年度の経験を活かすことができるように、同じ場所を選んで再度太田川探検隊に出かけることとした。また、季節を夏とすることで、昨年度の秋の様子との違いにも気づくことができるようにした。児童は、昨年度の経験を活かし、見通しをもって活動に没頭できると考える。学習の見通しがもてるからこそ、児童は、自分たちの想いを巡らせ、自分たちの考えをもつことができる。そのことが、自分なりのこだわりを持ち、自己決定を促す学習を保障すると捉えた。

以上のことから、実践にあたっては、次の2点を大切にしてきた。

- ◎ 体験活動を継続的に取り入れ、児童の豊かな気づきを引き出すようにする。
- ◎ 学習に見通しをもったうえで、一人ひとりが自分なりの想いを活かし、決めていくことのできる場を大切にする。

## 3. 実践事例 — 太田川探検隊パートII —

### (1) 単元の概要

#### ① 太田川探検隊パートIIについて

昨年度、環境領域の学習において、本学級の児童は、本校のすぐそばを流れる猿猴川の探検、猿猴川の上流での太田川探検隊パートI（山県郡加計町）の活動を行った。秋に実施されたこれらの活動において、児童は、太田川の上流と下流の水質の違いに気づくとともに、豊かな自然と触れあう機会をもつことができた。また、探検後の発表会では、それぞれの興味・関心にもとづいた発表を行い、情報の交流を図った。さらに、本年度の社会科学学習において、児童は、太田川の水が広島市の「命の水」として利用されていることを学習してきた。ここでは、水道の水がどこから来て、

どこへ行くのかを学んだが、蛇口をひねれば簡単に手に入る水と自分たちの生活との関わりを主体的に認識するまでには至っていない。

太田川は水都広島を代表する川である。総延長103kmに及ぶ河川は、冠山に源を発し、広島湾へとそそぐ。水は、流下する過程で様々な変化を受けている。また、季節によっても、太田川の見せる表情は様々である。このように太田川は、児童にとって身近な環境であるだけでなく、軸教材として継続的に関わっていく価値のある対象といえる。

指導にあたっては、まず、季節を夏に変え、再度太田川探検に出かける。3年生での秋の活動を想起することで、児童は見通しをもち、様々な活動に没頭することができるであろう。ここで、「加計町の水はどこに行くのだろう?」と問いかけることによって、広島湾へと向かう流下過程に気づけるようにする。また、宿泊を伴う「江田島海の学習」では、海の水に直接的に触れることで、太田川から広島湾へとつながる「水の循環」に目を向けることができるようにしたい。単元のまとめでは、「太田川とわたしたち」をテーマに、自分たちの願いや想いを発信できる場を設ける。このことをとおして、水を入り口として身近な様々な環境と主体的に関わっていくことができるようにしていきたい。

② 活動内容と計画……………全15時間

太田川探検隊パートII (9時間)	江田島海の学習に行こう! (宿泊学習)	これからの太田川とわたしたち (6時間)
<b>【活動の話し合い】</b> <b>【体験活動】</b> ○ジャンボ岩探検隊 ○選択活動 ・生き物調べ ・水質調べ ・水中観察 ・スケッチ ・バードウォッチング ・川渡り ・水遊び ・魚とり ・つり <b>【ふりかえりと表現活動】</b> ○太田川探検パートII発表会	<b>【活動の話し合い】</b> <b>【体験活動】</b> ○海辺の散策 ○カッター ○選択学習 ・サイクリング ・つり ・ハイキング <b>【ふりかえり】</b>	<b>【話し合い活動・準備】</b> 太田川から江田島へと循環している水について考え、太田川の未来について発信していこう。 <b>【ポスターセッション】</b> ポスターセッションで太田川の未来について自分たちの夢を発信する。

(2) 実践の概要

① 第一次【太田川探検隊パートII】に出発

7月7日、「太田川探検隊パートII」当日。今回は、第3学年単式・複式学級と合同で出発した。午前中は4年生全体でジャンボ岩探検に行き、午後からは、活動別にグループを組み、探検することとした。なお、児童166名に対して、引率教員8名では、児童の活動に十分に目が行き届かないため、保護者よりボランティアを公募し、13名の保護者の方に引率をお願いした。

事前の話し合いで、子どもたちは、昨年度の学習を活かし、次のような活動をスムーズに計画することができた。

- 1班 (5名)……………【スケッチ、水遊び】と【川渡り】
- 2班 (7名)……………【川渡り】と【水遊び】
- 3班 (5名)……………【水遊び】と【魚とり】
- 4班 (6名)……………【川渡り】と【釣り】
- 5班 (3名)……………【バードウォッチング、昆虫観察】と【水遊び】
- 6班 (3名)……………【水調べ】と【魚とり】
- 7班 (5名)……………【水中観察】と【水遊び】



〈保護者の方とJR可部線内で〉

子どもたちは、昨年秋との様子の違いにすぐに気づいた。水の量が多いこと、水温が水遊びに適していること、魚や虫などの生物がたくさんいること、などである。前回は、希望者だけでジャン

ボ岩探検に出かけたが、今回は、4年生全員でジャンボ岩の探検に出かけた。ジャンボ岩付近には、自然のままの河原が残っているため、理科の学習と関連づけることもねらいとした。

## ② 第二次【江田島海の学習】に出発

9月9日ー快晴。宇品港に集合し、高速艇にて一路海上を江田島に向かった。2泊3日の宿泊学習は、児童にとって初めての集団宿泊的行事であった。海での体験的な活動を十分保障するために、時期は9月初旬とした。この学習での、水に関わる体験的な活動は、次のようなものである。

《1日目》「海辺の散策」 《2日目》「選択学習」ハイキング、つり、サイクリング 《3日目》「カッター」

「江田島海の学習」は、環境領域の学習を主なねらいとするものではない。しかし、環境に関する直接体験を取り入れることができる重要な行事として位置づけている。「太田川探検隊パートII」との関わりからも、上流から海へと至る「水の循環」に気づくことができる学習でもある。

## ③ 第三次【これからの太田川とわたしたち】

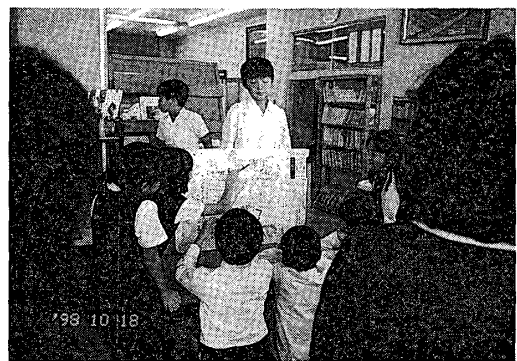
第三次は、2年間の太田川探検隊のまとめとして、自分と水との関わりに視点をあて、「これからの太田川とわたしたち」の学習を6時間もつこととした。

ここでは、まず、これまでの学習をもとに、児童が「水の循環」に目を向けることができるようにした。冠山→太田川上流→太田川下流→瀬戸内海→蒸発→降水という一連の循環の概要を説明し、身近な水がめぐりめぐって、自分たちのもとに戻ってくることを捉えられるようにした。本時の導入は、家庭での聞き取り調査をもとに、昔の太田川の様子を知ることとした。児童の聞き取りだけでなく、指導者の体験や過去の水質データをもとに、約25年前の高度成長期の太田川は、今よりかなり汚れていた事実をつかめるようにした。

この活動で児童は、現在及び過去の太田川の水の様子の概略をつかむことができた。その後、「保護者の方を招待して、ポスターセッションを開こう」と課題を確認した。「これからの太田川とわたしたち」に焦点をあて、子どもたちは想い想いの発表内容を提案した。学級全体での吟味を経て、自分の発表内容を決定していった。

本時の学習で児童が最終的に自己決定したセッションの発表内容と人数は次のとおりである。

自然ゆたかな太田川キャンプ場……………	3名
ゴミのない太田川ホテルへようこそ……………	3名
魚がたくさんつれるようなきれいな太田川……………	2名
マンボウがおよげるきれいな太田川……………	2名
クリアウォーターの太田川……………	5名
楽しいこいこい太田川……………	5名
みんながきてね太田川博物館……………	5名
もよおしのできる太田川……………	3名
流れがゆるやかな太田川……………	3名
探検にいける太田川……………	3名



〈太田川博物館に来てね〉

次時以降は、内容別のグループでポスターづくりを行った。子どもたちはそれぞれのこだわりを大切に、セッションの準備に取りかかった。創立記念日に行ったセッションでは、多数の保護者の参加を得ることができた。

## 4. 実践の考察

### (1) 体験活動の継続的な取り入れ

太田川探検隊パートIIでの活動を選んだ理由を児童に尋ねると、次頁のような結果となった。

「去年やって楽しかったから」が11名でもっとも多く、「去年できなかったから・去年やっているのを見てやりたかったから」の4名を合わせると半数近くの児童が、昨年度の体験をもとに活動を計画していたことが分かる。また、「調べたいこと・知りたいことがあったから」を理由とした児童

の多くは、猿猴川や昨年度の秋との違いを追究しようとしたものであった。

1	去年もやって楽しかったから……………	11名
2	調べたいこと・知りたいことがあったから……………	10名
3	楽しそうだから、やってみたかったから……………	9名
4	去年できなかったから、やっているのを見てやりたかったから……………	4名

このことから、2年続けて同じ場所での活動を取り入れたことが、豊かな気づきを引き出すうえで有効であったと言える。

## (2) 自己決定の場の保障

本実践では、子どもの想いを活かした展開を重視した。具体的には、先に述べた探検での活動内容を決める場、ポスターセッションでの発表内容を決める場での自己決定という形で取り入れた。

探検での活動内容の決定は、先に述べたように、スムーズになされた。

また、単元のまとめの「これからの太田川とわたしたち」で発表内容を決める場面では、子どもたち一人ひとりが自分の想いや願いを活かし、発表内容を自己決定する姿が見られた。例えば、約25年前、猿猴川に迷い込んだマンボウがそこで死んでしまった事実を知った子どもたちは、マンボウが泳げるような太田川になってほしいと考え、ポスターでそのことを発表した。また、猿猴川と上流との水質の違いに目を向けた子どもたちは、美しい水であってほしいという願いから、「クリアウォーターの太田川」をポスターにし、未来の太田川の姿を発信した。

以上のことから、自己決定の場を意図的に取り入れることが、子どものこだわりを大切にしたい学習を保障したと考える。

## 5 おわりに

本実践の終結部で、「今後、『環境』でやってみたいこと」を調査すると、次のようになった。複数回答であるが、多くの子どもが、「源流に行ってみたい」「もっと上流に行ってみたい」と回答している。「水の循環」に目を向けたものと考えられる。子どもたちは「環境」の学習を心待ちにしている。子どもたちの想いを活かした高学年での体験活動につなげていきたい。

○太田川の源流（冠山）に行ってみたい……………	10名
○もっと上流（三段峡など）に行ってみたい……………	8名
○もっと下流や海に行ってみたい……………	7名
○もう一度、太田川探検隊（加計）に行きたい……………	4名
○太田川以外の川や海に行ってみたい……………	3名
○中流（高瀬堰など）に行ってみたい、山にキャンプに行ってみたい、 太田川と猿猴川の水の違いを調べたい……………	各2名
○地下水の量を調べたい、家で使う水の量を調べたい、学校の水道を調べたい ダム見学に行きたい、インターネットで太田川のことを調べたい……………	各1名

その他、残された課題も多い。そのいくつかを箇条書きにすると次のとおりである。

◇ 学習のなかで、子どもから出された様々な疑問をどう取り上げていくのがよいか。個の追究に任せるか、全体の課題としていくか。また、自分タイムとの連携をどう図っていくか。

◇ 各学年段階に応じた鍵概念を系統的に指導していく必要があるかどうか。必要ならば、どの段階でどの概念を取り上げるべきか。

今後も、実践をとおしてこれらの課題に迫っていきたい。

<注> 昨年度の実践については、広島大学附属東雲小学校平成9年度研究紀要、「自立に向かう子どもたち」、鯉城印刷、pp. 249-254. を参照されたい。